

大学生男女が親になることについて考えるきっかけ

キーワード：大学生男女、親、意識

研究者	服部律子	名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程
共同研究者	後藤宗理	名古屋市立大学大学院人間文化研究科
	中嶋文子	京都大学医学部附属病院
	大久保摩里子	名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程

はじめに

次世代育成支援は今やわが国における重要な施策の一つである。2003 年には「次世代育成支援に関する当面の取組方針」¹⁾において、次世代を育む親になるための支援として、親になるための出会いやふれあい、子どもの生きる力の育成と子育てに関する理解の促進が盛り込まれるなど、子育て中の親に焦点をあてた支援から、子育ての準備期にある青年期男女をも含めた支援へとその対象が拡大されてきている。

我が国においては、1982 年に岩田ら²⁾によって初めて「親準備性」という概念が示されて以来、親になる準備段階にある青年期の男女を対象として、「親準備性」「親性準備性」「親になることへの準備状態」等、様々な表現を用いながら、親になることへの意識、態度、子育てに対する知識などに関する研究がなされてきた。その結果、男子よりも女子が^{3),4),5),6),7)}、高校生よりも大学生など年齢が高くなるほうが⁴⁾子どもや子育てに関心を抱いていたたり、子どもに対して好感情を抱いていたたりすること、そして、乳幼児に接した経験^{3),6),8),9)}や望ましい家族関係³⁾が子育てに対する意識に影響を及ぼしていることが指摘されている。

このように、親準備性の発達に子どもと接した経験などが関連していることが明らかにされ、近年では各市町村で保健所等を中心に中高生が乳児と接する機会が提供されるなどの取り組みが実施されている。しかし、青年期の男女が親になることをどのようなきっかけで意識し、関心を寄せるようになるのかについてはまだ十分に明らかにされていない。

研究目的

本研究の目的は、大学生男女の親になることへの意識、なかでも、どのような時に自分が親になることについて考えているのかについて明らかにし、親準備性を促す支援のあり方について検討することである。

研究方法

1. 調査期間と対象

A 県内にある A 大学の人文社会学系学部在籍する大学生男女 153 人を対象に、2007 年 5 月から 6 月に調査を実施し、88 人から回答を得た（回収率 57.5%）。

2. 調査方法

事前に 3 人の大学生男女に、親になることについての半構造化面接を実施し、そこで語られた内容や、授業の課題レポートの記述や友人とのメールでの会話などにより学生達が自分の考えや気持ちを文章で表現することに慣れている様子から、自由記述による自己記入式質問紙調査でデータを収集することとした。質問紙には「どのような時に親になることや子どもを育てることについて考えましたか」という質問を設定し、きっかけとなった場面や状況、その時にどう思ったのかを具体的に記述するよう求めた。

3. 分析方法

分析にあたっては、記述された内容を通読し、その中から親になることについて考えたり感じたりした 1 場面を 1 つのエピソードとして抜き出した後、記述された内容を解釈し、カテゴリーを抽出した。さらに、抽出されたカテゴリー全体を概観し、類似性と相違性から上位のカテゴリーに分類した。

内容の解釈やカテゴリー化にあたっては、3 人の研究者で討議を行い、分析過程について同様の研究手法の経験のある研究者からスーパービジョンを受けながら実施した。

4. 倫理的配慮

調査は無記名で実施した。文書と口頭で研究の意義や目的、協力しない場合にも不利益を被らないこと、質問紙への回答をもって研究協力への同意とみなすことを説明し、回答後の質問紙は封筒に入れて対象自身の手で封をした後に、校舎内に設置した回収箱に投函するよう依頼した。なお、本調査は研究者の所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

結果

1. 対象の属性

88 人の平均年齢は、19.8（標準偏差 1.0）歳で、65 人（73.9%）が女子、23 人（26.1%）が男子であった。

2. どのような時に親になることについて考え、どう思ったか

特定の状況や対象への批判に限定されているものや、記述が途切れているものを除き、79 のエピソードを得た。これらの内容を概観したところ、男女ともに同じような記述が認められたため、男女を合わせて分析した。その結果、【親子モデルの観察によ

表 1 大学生男女が親になることについて考えるきっかけ

カテゴリー	サブカテゴリー
親子モデルの観察による子育てイメージの形成	<ul style="list-style-type: none">・モデル観察によって引き出された子育てのイメージ・モデル観察による親像の空想・モデル観察による親役割の模索・幸せそうな家族モデルの観察による家族形成への願望や好感情・身近な人の出産（幸せそうな姿）によって引き出された親になることへの関心・子育ての姿への投影によって生じた親になることへの不安感や否定的感情・親役割に対する規範的イメージと自分自身の実践の可能性との間に生じた不安感・親の問題行動から形成された親役割に対する規範的イメージ
子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情	<ul style="list-style-type: none">・子どもの好意的態度によって引き出された子どもへの好感情・子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情
子どもや子育ての学習	<ul style="list-style-type: none">・子どもや妊娠・出産に関する学習によって喚起された親になることへの関心・子どもの特性を理解したことによって引き出された子どもへの好感情・子どもの特性や子育てを知ったことによって生じた子育てへの不安感や否定的感情
親からの影響	<ul style="list-style-type: none">・親からの学習によって形成された子育てへの好感情・親の養育姿勢からの親役割の模索・親の期待に応える手段として子どもをもつことへの希望
親密な異性との家庭形成の空想	
就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索	

る子育てイメージの形成】、【子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情】、【子どもや子育ての学習】、【親からの影響】、【親密な異性との家庭形成の空想】、【就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索】という6つの【カテゴリー】と17のくサブカテゴリー＞が抽出された。

(1)【親子モデルの観察による子育てイメージの形成】

この【カテゴリー】には、表1に示したような9つのサブカテゴリーが含まれた。「公園やレストランなどで小さい子ども連れのお母さんを見たとき、自分に子どもができたら元気でみんなに愛される子どもに育てたいと思った」のように、親子モデルを観察することによって自分の子育てへの具体的なイメージが引き出されている様子から抽出された〈モデル観察によって引き出された子育てのイメージ〉、「車の通行が多いのに親が子どもの手をつないでなくて危ない場面を見たとき、自分が親なら手をつなぐのにと考えた」のように親子モデルを観察して自分が親だったらと空想していたり、「街中で小さな子どもを連れた親の様子を見たとき、親になるってどういうことだろうと考えている」というような、他の親の姿をみて親役割を模索している様子から、〈モデル観察による親像の空想〉、〈モデル観察による親役割の模索〉が抽出された。

また、「ドラマなどで幸せそうな家族を見たときに、自分もこんな幸せな家庭を築きたいと思う」「お父さんとお母さんと小さな子どもの幸せそうな家族の様子を見て、ほほえましく、幸せそうでいいなあ、自分もこうなりたかった」「公園でキャッチ・ボールをしている親子を見たとき、日曜日にこんなふうに家族で過ごすのは楽しそうだなあ、いいなあと思った」のように、幸せそうだと感じる家族モデルを見て、単に子どもをもちたいというだけでなく、モデルのような家族を形成したいという願望やそのような家族を形成することへの好感情を抱いているなど、「幸せそう」と感じる親のモデルを観察したことによって、自分を同一化させ、子どもをもって家族を形成することに対する願望や好感情が引き出されており、〈幸せそうな家族モデルの観察による家族形成への願望や好感情〉のサブカテゴリーが抽出された。

「同年齢の芸能人が出産したとき、もうそんな年なのかと思って考えた」「自分の周りの人が結婚して出産した時」「小さいとこが生まれたとき」「彼氏に甥が生まれて赤ちゃんを身近に感じたときに、子どもや結婚が遠い存在でなくなった」「同級生が子どもを産んで母親になったとき、子どもをもつことに現実味が帯びてきた」「自分の親が自分を産んだ年齢に近づくに従い、親になることをよく考えるようになった」のように身近に感じる人の妊娠、出産によって自分が親になることへの関心を示している様子が認められたというように、身近に感じる人の出産などからも親になることについて考えており、〈身近な人の出産により喚起された親になることへの関心〉を抽出した。身近な人からの影響では、「知り合いが赤ちゃんを連れて遊びに来たとき、自分もいつかこんなふうに子どもをもって新しい家庭を築くと思ったら嬉しかった」「担任の先生が結婚・出産してすごく生き生きしているのを見て親になることを考え、いいなあ、自分もこんなふうに明るく楽しく子育てしたいと思った」などのように、身近な人物が親になって幸せそうにしている姿を見て、親になることへの関心が喚起されただけでなく、親になることに対する願望や好感情を抱いている様子も認められ、〈身近な人の出産（幸せそうな姿）によって引き出された親になることへの願望や好感情〉とした。

このように、肯定的イメージが形成されている一方、「親戚の人から自分の子どもの時の話を聞いて、自分に親の姿を当てはめてみたが、自分に子どもを世話したりできるのかなあ・・・自分にはできないだろうなあと思った」や「友人が子どもを連れて遊んでいる姿を見て、自分だったら・・・と考えると、自分は親になれるだろうかと考えてしまう」というような他の人の子育ての姿に自分を投影させてみて、子育て

に対する不安感や否定的感情を抱いている＜子育ての姿への投影によって生じた親になることへの不安感や否定的感情＞や、実際に親の様子を見て「いろいろな親がいる（批判も含め）。子どもをどこでどのように育てるのが良いのか、自分にできるか考える」「虐待について調べているが、自分は苛立ちなどを抑えて手をあげずにいられるか、などと考えてしまう」というような、自分が抱いている親役割に対する規範的イメージに対し、自分がそれを実践できるかどうかと考え、不安を抱いている、＜親役割に対する規範的イメージと自分自身の実践の可能性との間に生じた不安感＞という否定的なイメージ形成も抽出された。

また、「虐待や親子心中の報道を見たとき、思う通りにならないことがあっても子どもを自分の感情のはけ口にしてはいけないし、自分の都合で振り回してはいけないと思った」や「問題を起こす子どものニュースを見たとき、親は良いことと悪いことを教えるべきだし、子どもの見本にならなくてはいけないと思った」など、自分が親になることに対する反応はないものの、他の親の様子を批判的に見ながら親とはどうあるべきかを考え、親の役割に対する規範的イメージを形成している様子も認められ、＜親の問題行動から形成された親役割に対する規範的イメージ＞が抽出された。

このカテゴリでは、親子モデルの観察を通して子育てについてイメージを形成している様子が認められたが、そのイメージは肯定的感情を伴うものと、否定的な感情を伴うもの、そして、親役割に対する規範的イメージの形成という3つの側面が認められた。

(2)【子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情】

このカテゴリには、＜子どもの好意的態度によって引き出された子どもへの好感情＞、＜子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情＞の2つのサブカテゴリから形成されていた。

＜子どもの好意的態度によって引き出された子どもへの好感情＞は「小さな子どもが寄ってきて、その子と一緒に遊んだりしたときにすごくかわいいなあとと思った」「電車内などで知らない子どもが自分に笑いかけるととき、漠然と子どもが欲しいと思った」というような、子どもの自分に対する好意的な態度によって子どもへの好感情が引き出されたものである。＜子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情＞は、「友達と遊びに行ったときにその友達が子どもを連れてきた。大変そうだけど子どもってかわいいなあとと思った」、「小さな子ども連れの親子を見た時に、子どもは可愛いなあ、自分も子どもが欲しいなあと思った」や「幼稚園児を見たときなどに、子どもってかわいいなあ、自分も子どもが欲しいなあと思う」などのように、子どもが自分に対してどうであったかとは関係なく、子どもを見たり接したことによって引き出された好感情である。

ここでは、子どもと接した経験によって子どもへの好感情が引き出しされているものの、子どもの自分に対する好意的態度に誘発される場合と、子どもが自分に対してどうであったかとは関係なく好感情が引き出されている場合との2段階に分かれていた。

(3)【子どもや子育ての学習】

このカテゴリには、「家庭科の保育の授業の時に親になることについて少し考え

た」「保健の授業で妊娠や出産について学習したとき親になることについて考えた」のように、学習をしたことによって関心が喚起されている様子が記述されていた。これらは、子どもに関する学習や、妊娠・出産に関する学習をきっかけに親になることについて考えてはいるものの、親になることへの関心が喚起されたに止まっており、それ以上に発展していないものである。そこで、これらを、＜子どもや妊娠・出産に関する学習によって喚起された親になることへの関心＞とした。学習による影響では、「授業で子どもについて勉強したときに子どもってかわいいと思った」というように、子どもの特性を理解したことで子どもへの好感情が引きだされていることもあり、＜子どもの特性を理解したことによって引き出された子どもへの好感情＞を抽出した。

また、同じように子どもについて授業や社会経験の中で学習した場合でも、「授業で子どもについて勉強したときに自分に育てられるか不安に思った」というように子どもの特性を理解して子育てへの不安感を抱いたり、「知人から子どもの様子を聞いて、子どもの世話をするのは大変だなあ、と考えさせられた」、「本などで子どもの教育費が高いという事実に触れたとき、親になるとお金の苦労をするのかあ・・・と思った」、「わがままを言う子どもを親がしかっているのを見て、子どもを育てるのは大変だと感じたし、親の対応で子どもがどう育つかが変わるのは怖いことだと思った」というような、子どもや子育てについて知ったことによって、拒否のような強い感情ではないものの、「自分にはできない」という、子育てに対する否定的な感情や子育てに対する不安感が生じており、＜子どもの特性や子育てを知ったことによって生じた子育てへの不安感や否定的感情＞が抽出された。

(4)【親からの影響】

「親といろいろなことについて深く話し合った時、親って大変だけど学ぶことがたくさんある」「親から子育てのことを聞く時、親になることは大変であるが、立派なことであると思った」というような記述が認められ、＜親からの学習によって形成された子育てへの好感情＞というサブカテゴリーが導き出された。また、「親が自分のために経済的な負担をしてくれるとき、親になることについて考える」のように親の養育姿勢をみて親になることについて考えているが、親になることについては具体的な考えや感情は引き出されていない状況が認められ、＜親の養育姿勢からの親役割の模索＞に分類した。

さらに、「親が何気なく孫の顔を見たいと言った時に、子どもを産むことを期待されているんだなあと思い、親になることを考えた。生まれてくる子がみんなから祝福されるのであれば産みたいと思った」というような、内発的ではなく、「親の期待に応える」や「祝福されるのであれば」と言ったような、外部の条件や状況に依存的に親になることを模索している記述が認められ、＜親の期待に応える手段として子どもをもつことへの希望＞とした。

(5)【親密な異性との家庭形成の空想】

「彼氏と将来について話したとき、子どものことを考えた」「彼女（彼氏）ができたときに、自分が親になるということについて考えた」、「彼女と将来のことや子どものことを話したとき、結婚なんてしたくないと思っていたが、子どものためなら結婚してがんばれそうだった」というように、親密な異性との交際を通じ、将来の家庭形成を

思い描き、その中で親になることを考えている様子が示された。

(6)【就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索】

「就職活動をするにあたって自分のライフプランを考えてみて、親になることがより具体的になった」「将来の職業を考えたときに、結婚や子育てをどうするかと考えた」「将来の話や結婚の話をするとき」というように、将来の仕事を考えたり就職活動をしたことをきっかけに、親になることを含めてライフデザインを描こうとする記述が認められ、これらから、【就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索】というカテゴリーを抽出した。

考察

今回の結果では、親になることについて考えるきっかけには、親モデルの観察や子どもとの接触、そして子どもや子育てに関する学習という一時的な刺激と、親からの影響や親密な異性との交際、就職活動という持続する刺激があることが明らかとなった。

子どもと接した経験が青年の子どもや子育てへの関心や好感情を高め、青年の親準備性に影響を及ぼしている^{3),6),7),9),10)}ことは先行研究でも指摘されており、今回の結果でも、子どもと接したことによって子どもへの好感情が引き出されていることが明らかになった。しかし、子どもや子育てに関する学習や親子モデルの観察は、子どもへの好感情を抱くといったような肯定的な反応を引き出すこともあれば、子育てへの不安感を抱くというような否定的な反応を引き出すこともあることが明らかになった。中嶋ら¹¹⁾は子どもと接した場面で経験した内容によって子育てに対する拒否的な感情が生じることを指摘している。今回の結果でも、子育ての大変さに触れた場合に否定的な感情が生じており、一時的な刺激であるだけに、その内容には注意が必要ではないかと考えられた。また、青年自身の発達段階などによる影響も考えられ、この点については今後さらに検討が必要である。

親密な異性との交際や、就職活動をきっかけにライフデザインを模索するという中で親になることを考えている点についてみると、青年期の発達の中で親になることを考えていると考えられる。Arnett¹²⁾は青年後期のこの時期を Emerging Adulthood とし、アイデンティの探求や自己満足のいくゴールに着目した大人になることの展望が起こると述べている。Arnett によれば、アイデンティの探求は恋愛や就労、思想、世界観に対する問いへの反応として起こり、中でも恋愛と就労との関係性が強調されている。親になることを展望し、親としてのアイデンティティを形成することもその一部であると考えられ、今回抽出された【親密な異性との家庭形成の空想】や、【就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索】はこのようなアイデンティティの探求を反映していると考えられる。また Sommer¹³⁾は、妊娠前の子育てに対する準備状態は子育て中の母親の親としての行動やストレスの感じ方に影響を及ぼしていると述べており、親準備性は、アイデンティティの探求の一部であると同時に、親という役割の社会的学習でもあったと考えられる。Bandura¹⁴⁾は社会的学習理論の中で、モデリングは注意過程、保持過程、運動的再生過程、強化と動機付け過程の4つの相互に関係する過程からなると述べているが、今回抽出されたカテゴリーの中でも、【親子モデルの観察

今回抽出されたカテゴリーの中でも、【親子モデルの観察による子育てイメージの形成】や【子どもや子育ての学習】、【親からの学習】は注意過程や保持過程にあたり、本人もしくはパートナーの妊娠などにより実際に自分が親になる前の学習の始まりであると考えられた。

さらに、「親が期待しているなら」と親の期待に応える手段として子どもをもつことを希望しているような反応もあり、アイデンティティが形成されないまま、内発的な動機づけなしに親になる可能性もあることが考えられ、この点についてはさらに検討する必要があると考えられた。

まとめ

今回の結果から、青年が親になることについて考えることは、親へと移行する上での社会的学習の始まりでもあり、青年自身のアイデンティティの探求でもあったと考えられた。親になることについて考えるきっかけは、親密な異性との交際や就職活動という、青年がアイデンティティを探求する上で重要な要素であると言われている恋愛や就労であることがわかった。これらはある期間持続して存在する刺激であるが、親になることについて考えるきっかけには、この他に親モデルの観察や子どもとの接触、そして子どもや子育てに関する学習という一時的な刺激もあることがわかった。これらの一時的な刺激は、モデリングの注意過程、保持過程にあたる内容であることから、これらの一時的な刺激によって社会的学習が始まると考えられた。しかし、子どもや子育てに関する学習や親子モデルの観察などの刺激は子どもや子育てに対する肯定的な感情を引き出す一方、否定的な感情を引き出すこともあることがわかった。子どもや子育てに関する青年の理解を促すような介入においては、子どもや子育てに対して否定的なイメージが形成されないよう内容や場面に注意が必要であると考えられる。否定的感情を引き出す要因については、青年の発達段階等も含め、今後さらに検討が必要である。

文献

- 1) 厚生労働省：次世代育成支援に関する当面の取組方針（少子化対策推進関係閣僚会議決定）、
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0318-6g.html>, 2003
- 2) 岩田崇、秋山泰子、井上義朗、深谷和子：青年期の親準備性に関する研究（研究代表者小林登、「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究）、昭和57年度厚生省心身障害研究報告書、466－467、1982
- 3) 牧野カツコ、中西雪夫：高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（1～3）、日本家庭科教育学会誌、32(2)、51－66、1989
- 4) 滝山桂子、斉藤一枝：中学生・高校生・大学生の親準備性の実状。秋田大学教育学部研究紀要、教育科学、52、39－46、1997
- 5) 伊藤葉子：中・高校生の親準備性の発達。日本家政学会誌、54(10)、801－812、2003
- 6) 岡本祐子、古賀真紀子：青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析。広島大学心理学研究、4、159－172、2004
- 7) 松岡治子、和田佳子、花沢成一：青年期男女における親性準備性の性差および母性度・父性度の発達。母性衛生、41(4)、492－499、2000
- 8) 松岡知子、堀内寛子、山中亜紀、伊藤倫子：男女大学生の親になることに関する意識。母性衛生、41(4)、398－404、2000
- 9) 松岡治子、和田佳子、花沢成一：青年期男女における母性度・父性度の発達に関する要因の検討。母性衛生、41(4)、500－505、2000
- 10) 杉本真理子：大学生の子どもへの関心の様相－親準備性との関連から－、青少年問題、38(9)、12-18、1991
- 11) 中嶋律子、北川真理子、小笠原昭彦他：高校生・大学生の親になることへの意識、名古屋市立大学看護学部紀要
- 12) Arnett, J. J.: Emerging adulthood, Arnett, J. J. & Tanner, J. J.(Ed.), *Emerging Adults in America: Coming of Age in the 21 century*, American Psychological Association、3-55、2006
- 13) Sommer, K. S., Whitman, T. L., & Borkowski, J. G. et al.: Cognitive readiness and adolescent parenting, *Developmental Psychology*, 29(2)、389-398、1993
- 14) Bandura, A.: *Social Learning Theory*, General Learning Corporation、1971、原野広太郎・福島脩美訳、人間行動の形成と自己制御、金子書房、1974